

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



佐々木氏の住む二本松市にそびえる薬師岳山頂より安達太良山を望む標柱は二本松市に生家のある高村智恵子に因んだことば。

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 講義抄録「真宗儀式の教相」 ②・③
- ・ 情報交換会報告
被災地の声、あなたの声、わたしの声 ④・⑤
- ・ 映画学習会報告
「いのちの犠牲」に隠された実状を知る ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆ 挟み込み (※寺報などにご利用ください)

助ケテ下サイ

福島第一原子力発電所でおきた水素爆発によって、大量の放射性物質が飛散して六ヵ月半が経過した。これまで「ヒロシマ」「ナガサキ」から発せられた

「ヒロシマ」「ナガサキ」から発せられた聲は、私の耳に届けられていたはずである。しかし、いのちの尊厳を奪う原発の本性を見過ごしてきたこの身の事実を振り返るとき、根源的無明を生きてきた私一人に対する重大な責務が問われるばかりである。

もう一度、「ヒロシマ」「ナガサキ」の聲を聴かねばなるまい。

- コレガ人間ナノデス
- 原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ
- 肉体ガ恐ロシク膨張シ
- 男モ女モスベテツノ型ニカヘル
- オオ ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ爛レタ顔ノムクンダ唇カラ
- 洩レテ来ル声ハ
- 「助ケテ下サイ」
- ト カ細イ 静カナ言葉
- コレガコレガ人間ナノデス
- 人間ノ顔ナノデス

原 民喜

「コレガ人間ナノデス」原爆小景より

ヒロシマで遭遇した地獄絵図を自身の生涯に刻むべく、原民喜氏はこの詩を書いた。

それから六十六年。平和利用を掲げた原子力が、今、人々を苦しめている。福島に広がる景色は、彼が見たヒロシマとは違い、木々には緑があふれ、空はどこまでも青く美しい。

しかし、過日、福島の実状を訴えに名古屋までお越しいただいた佐々木道範氏(本誌六・七頁掲載)によれば、故郷を追われ、家族や地域の絆が分断されている様相は、見た目には何も変わらない東北の大地の美しさとは裏腹に、想像以上に深刻だ。これまで豊かな恵みを入々に与え、人々の絆を育んできた東北の空と大地と海には、目に見えない放射線が降り注がれ、底知れぬ不安と絶望を振りまきながら、これまでの絆を分断している。

これから極楽のような紅葉を迎えようとする東北の景色の中に、原民喜氏が見た炎と血の地獄が不思議に重なる。そして、原氏の「助ケテ下サイ」と、佐々木氏の「たすけてください」が、「南無阿弥陀仏」の声に私を繋げてくれる。

(教化センター主幹 荒山 淳)

講義抄録

2011年7月29日

研究生教化研修「真宗儀式の教相」

私にとって宗祖親鸞聖人

七百五十回御遠忌法要とは

瀬尾 顯證氏（真宗大谷派儀式指導研究所研究員）

震災と御遠忌法要

さる五月二十八日、宗祖親鸞聖人の七百五十回御遠忌法要が円成いたしました。皆さんもご承知の通り、三月十一日の大震災によって、大幅に内容が変更されました。賛否両論といえますか、一つのことを成し遂げるには、手を挙げて下さる方、またそうでない方、色々ありますけれども、ともかく大震災によって大幅に内容が変更されました。

災害に遭われた方にとっては本当に大変なことであります。心よりお見舞い申し上げます。私自身もなかなか現地まで出かけて、救援のお手伝いをするのも出来ないまま今日に至っており、恥ずかしいことでございます。

こうした中で、「未曾有」の大震災、「想定外」の津波という言葉が非常に多く使われました。私自身、何の抵抗もなく本当にそうだなあと感じたのですが、今、検めて思いますと、こうした大自然の営みというもの、本当に「未曾有・想定外」であったかということが問われてまいります。私どもの生涯というのは、せい



ぜい五十年、百年という単位です。たまにその間に、私の身の回りで今回のような大災害が起きてこなかったからといって、「未曾有だ」というような言い方は、実はおかしいわけでありませう。この地球を含めた大自然は、それこそ何億、何十億年という単位で生き続けているわけ、その間に、実は何百回も今回のような天変地異というようなものがあつたのだと思います。たまたま私のこれまで

の人生の中で出遭わなかったからといって、「未曾有」「想定外」と、言い切ってしまう在り方に少し問題があるように思っています。

さて、本日お配りした資料を読ませていただきます。

又同じころかとよ、おびたしく大地震振ること待りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土さけて水わきいで、巖われて谷まるびい。渚漕ぐ船は波にたゞよひ、道ゆく馬は足の立ちどをまどはず。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、ひとつとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ち上りて、盛りなる煙の如し。地の動き家の破る、音、雷にことならず。家の内にをれば、忽ちにひしげなんとす。走り出づれば、地われさく。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲に乗らむ。恐れなかに恐るべかりけるは、只地震なりけりこそ覚え待りしか。――（中略）――すなわちは、人みなあぢきなき事を述べ、いさゝか心の濁りもうすらぐと

見えしかど、月日重なり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。

（岩波文庫「新訂 方丈記」）

これは、今から八百年ほど前に、鴨長明によって書かれた『方丈記』の一節です。この方は、本来ならば京都の下鴨神社の神職になるべき人であったと言われています。お父さんが神職で、自分の長男であるこの長明をゆくゆくは、その神社の神職にしたいというような願いを込めて大事に育てられたのですが、様々な軋轢により、結局は神職になることが出来なかつた方でありませう。紹介させていただいた一文は、ちょうど親鸞聖人が十二歳頃のことでと思ひますが、京都の都に大きな地震が起きたことが記されています。

こうした災害は先ほど申しましたように、五十年、百年の間で、たまたま出遭わなかつたということだけで、常日頃から当然あるべきことだったので、生あるものは必ず死に帰し、形あるものは移ろいで姿を変えていくというのが、釈尊の悟りの内容であつたはずですが、しかし、我々は「未曾有」「想定外」を何か責任逃れのような言葉として、使つてきたようなことが反省させられます。

このような中で、大谷派、真宗本廟の御遠忌法要というものも随分形を変えて、震災で亡くなられた方、あるいは被害に遭われた方というものを偲んで、「被災者支援のつどい」の願いを引き継いだ形で厳修されました。今まで何年にもわたって準備されてきた法要や行事が変更されたことは非常に残念なことですが、

このたびの震災を受けて、私たちが出遇ってきた仏教、あるいは真宗というものをもう一度、受け止め直していかなければならぬ大きな課題をいただいたのではないかと思っております。ただ、「残念だった」ということだけで月日が経って、震災に遭ったことさえ忘れさられていくことが非常に怖いことであります。それに加えて、原子力発電という問題も関わっているわけで、世間の出来事だから、政府や電力会社に任せておけばいいというだけのものではなからうと思いません。やはり、真宗門徒として、仏教に縁あるものとしての関わり方があるのではないのでしょうか。

大谷派の儀式

さて、儀式には「一つの方向を立てて、きちんと次第を立てて行事を進ませる」という要素があります。特に、「一つの方向を立てる」ということが大事なのだと思います。ひとくちに儀式と言いますが、一般社会でよく行われている入学式だとか、あるいは始業式、結婚式なども一つの儀式と言えるのではないかと思います。そのような中で、我々真宗大谷派で執行されている儀式はどのようなものなのでしょうか。我々の宗派にとりましての憲法のような宗憲というものがありませんが、その第十二条には、

本派の儀式の主なものは、次のとおりである。

一 法要式 二 得度式 三 帰敬式

『真宗大谷派宗憲』（第十二条）

となっております。そして、その後に続いて、

2 法要式は、佛祖を礼拝し、所依の聖教を誦誦し、佛徳を讃嘆して報恩の誠を尽くす儀式である。

3 得度式は、本派の僧侶となる儀式であつて、御影堂において門首がこれを行う。

4 帰敬式は、本派に帰依の誠を表わす儀式であつて、門首がこれを行う。ただし、住職及び教会管理者は、門徒の希望により、これを行うことができる。

『真宗大谷派宗憲』（第十二条）

という文面になっております。

さらに、宗憲第七十九条には、「僧侶は、佛祖に奉仕し、教法を研修宣布し…」と謳われていますが、どこか、我々は教義の宣布ということと儀式の執行ということが別れているように感じてしまうのです。本来は、かけ離れたものでは当然ないわけでありませう。一つの中にもう一つのものを含んでいるわけです。さらに儀式というと法要式だけに心が向いてしましますが、この条文からは、得度式、帰敬式というものも、儀式としておさえられていきます。

得度式や帰敬式を受けるということは、「佛法僧の三宝に帰依した生涯を歩

むのだ」という一種の告白であり、仏教徒として歩む上で非常に大事な意味をもっています。

いずれの場合も、手を合わせて親鸞聖人あるいは阿弥陀如来の御前に身を投げ出すということが非常に大事なことであります。

お内佛は生活の環境整備の場

儀式の構成からいえば、三帰依文を唱和した後に引き続き行われることは、

頭の前から足の先まで全てを仏様、あるいは親鸞聖人に投げ出すという儀式上の行為をするわけです。両方の手を合わせて頭を下げて合掌礼拝をする。これこそ五体投地の変形ですね。略式のものであろうと思いますが、「帰依」とか「帰敬」とか「南無」ということを身体で表現している。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」と親鸞聖人が表白されたこの二句は、「自分自身のすべてを『佛』に投げ出します」というような表白がまず先にあって、その後の百二十句の偈文が詠われてくる。ということであろうと思えます。そして、「法要式とは、佛祖を礼拝し、所依の聖教を誦誦し、佛徳を讃嘆して報恩の誠を尽くす儀式である」と、このように出ておりますが、この「佛祖を礼拝する」ということが、「帰敬」という意味を持つているのだと思えます。私の思いを温存したまま佛に帰依・帰敬するということは本来あり得ない。正しい帰依ではないと、先ほど申したような五体投

地して佛に礼を尽くすということは、私のすべてを否定し尽くして佛前に体を投げ出すということでありませう。

法要式においても、私の全てを投げ出すというようなことが、この第十二条に謳われております。私たちは日ごろ、何気なく彫刻や絵や文字で表現されたものを御本尊として、僧俗共に手を合わせています。そして、常に自身の身に起きた浅い経験のみを頼りとしているのが我々の姿です。しかし、そんな私だからこそ、方便法身尊形としての阿弥陀如来が安置されているのでしょうか。

私たちはこうした生活の中心たる御本尊を据えることを通して、南無阿弥陀佛の世界に出遇っていくのです。その歴史が仏前のお給仕という形で伝えられてきているのです。ですから、儀式といえは、ただ「御経を読み、偈文を唱える」ことのように思われがちですが、私の心を一つしつかりと阿弥陀様の方に向ける場所というものを整備する。言い換えれば、私の日々の生活の環境を整備する場を整えるということが、莊嚴作法という形で伝えられてきているのだと思えます。

このたび厳修されました御遠忌法要におきましても、まさに我々の勝手な「想定」が問われ、さらには、これから私たちの歩むべき方向を、指し示していただいたのではないかと感じさせていただいております。

皆様方にとりましては、どのような御遠忌法要となりましたでしょうか。

被災地の声、あなたの声、わたしの声

——東日本大震災と自死念慮を考える情報交換会7・11——

教化センターの研究業務である「現代社会と真宗教化」という課題への取り組みとして、さる7月11日に名古屋別院対面所にて行われた「東日本大震災と自死念慮を考える情報交換会」を後援し、研究員と職員がこれに参加した。

同催しは、「自死者追悼法要」を企画・執行している宗派を超えて結成された「いのちに向き合う宗教者の会」の呼びかけで行われ、震災以降、様々なかたちで復興支援に携わっている団体や個人に呼び掛けられ、実施されたもの。

50名を超える参加者は、同会によって用意されたお茶などを飲みながら、それぞれが自由に情報交換し、各団体を代表する形での五名の方々からの活動報告については、熱心に耳を傾けていた。

本号では、そのときに報告された内容の一部を抜粋して紹介する。

山田涼子

(愛知ボランティアセンター)

私たちは、物資を名古屋で集めて被災地へ届けています。名古屋であらかじめ仕分け作業（男性・女性用、サイズなど）をし、被災地にボランティアを派遣して物資を直接手渡します。そして、被災地では瓦礫撤去や泥かきなど、要望によって臨機応変に動けるボランティアを目指して活動しています。有り難いことに、被災地の方からは「愛知ボランティアセンターは生きたボランティアだ」という声もいただいております。

また、ワンコインサポーターという活動もしています。これは、毎月500円ずつの支援を頂き、震災時にお腹にいた赤ちゃんが高校を卒業するまでの19年間、奨学金を送り続けようという活動です。(http://aichiborasan.org/)

今回の震災は範囲も大きく、長期にわ

たる支援が絶対的に必要です。これからも愛知ボランティアセンターは、たくさんの人に出会い、たくさんの人とともに東北を応援し続けていきます。

黒田真慈

(真宗大谷派名古屋教区災害ボランティアネットワーク)

震災以来、被災地の方々は「ありがとうございます」と頭を下げ続けてきました。世界中からの支援が被災地を助けた。世界中からの支援が被災地を助けた。勇気づけてきたのはとても意味のあることだと思います。しかし衣食住全体的にだいたいの生活を続ける内に、だんだん元気を失っているような気がするのです。どのような境遇であれ、人は「必要とされる存在」でありたいのです。

ある時、支援活動をしていた私が、逆に被災者の方々の好意に甘える場面が生まれました。その時、驚くほど被災者の表

情に元氣や明るさが戻ってました。「人の役に立つ」という素直で当たり前の行いが、多くのものを失ってしまった被災者の生きる活力、さらにはお互いに支え合う関係を回復したのです。

被災地ではこれから仮設住宅に移って地域づくりを始めていかななくてはなりません。そこで一方的に支援する(される)関係ではなく、互いにありがとうと言いつつ合える関係を取り戻し、そこで互いに自立自尊し、地域全体で人を見守る目、話を聞く耳、助ける手が広がっていく、本来あるべき人間関係が再び作りだされていくことを願っています。

私自身も「こないだ、いただいたご飯がおいしかったから、また来ちゃいましょう」と逆に甘えさせてもらいなながら、長期的、継続的なつながりを築いていくことができると願っています。

野口孝子

(名古屋市健康福祉局障害企画課)

自殺対策は、様々な複合的な悩みを抱えていることを踏まえて、生活支援と心の問題を必ずセットで行なうという点が、災害時の支援と共通しています。たとえば、心の問題の相談の背景には、経済的な問題、子育ての問題、家族の介護の問題に悩んでいるということがあります。名古屋市では、悩んでいる人をより適切な相談機関につないでいくために「こころの絆創膏」キャンペーンを展開しております。ウェブサイトでは、個別に相談機関を検索できるようにしていますので、是非ご利用いただきたいと思えます。(http://www.inochiakari.city.nagoya.jp/)

また、悩んでいる人に気づき、声をか

け、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人をゲートキーパーと呼んでいます。家族、友人、知人という身近な人のゲートキーパーには誰でもなり得るわけですが、僧侶の方やボランティア活動をされている方などは特に、ゲートキーパー的な役割をされる機会が多いのではないかと思います。行政機関や専門機関に相談をつないでいくということが、地域づくりや災害時における人と人のつながり、また自殺対策という点でも、大きな意味をもってくるのだと思っております。

関口威人

(レスキューストックヤード)

私たちの支援活動の特徴のひとつに、足湯という活動があります。これは阪神淡路大震災の時に始まり、新潟県中越地震の時に広まった活動です。足をお湯につけてもらい、上半身を中心に手の平や



肩、腕を軽くさすって全身の血行を良くします。それによって、断水でお風呂に入れなくてもスッキリとした気持ちになり、身体を癒す効果があります。

また、被災者の方たちと向き合って話をするにより、被災当時の状況や、気持ち、困っていること、必要としている物などをポツリポツリと話をしてくれます。その声から、避難所が今どういう状況にあるのが少しずつ見えてきます。その見えてきたことを役場や名古屋の本部につなげていきます。コミュニケーションをとるという活動が、足湯活動の重要な意味であります。

泥かきなどの活動と同時に、足湯や仮設住宅での喫茶コーナー運営などの活動をする事によって、被災者に寄り添い、孤立や、孤独死という状態に陥ってしまわないように心がけています。被災地と言っても、それぞれの地域性があり、復興のペースに違いがあります。一人ひとりの方に、どのように寄り添い、支援を続けられるかが大きな課題だと思っています。(http://www.rsy-nagoya.com/rsy/)

根本紹徹
(いのちに向き合う宗教者の会 代表、臨済宗妙心寺派大禅寺住職)

自分のことで精一杯、時間もお金も他人の事に使いたくないという人が多い中、こんなにも大勢の方が「何か自分にもできることがあるんじゃないか」「何かしたい」とい



う思いを実践し、このような場にお越しいただき誠に有難いことだと思えます。皆さん、いろいろな所に行って支援活動をされて、やはり心の問題ということを感じておられるのではないのでしょうか。統計上の話ですが、全国で20%、昨年と比べて自死者の数は増え、福島に関しては40%も増えています。昨年まで13年連続で年間3万人の方が自死されていますが、今年は4万人に増えるのではないかとも言われています。

私は自死問題に関わって8年になります。震災翌日、自坊の山門前に一人の男性がうろろろしていました。上がってもらってお茶を出したのですが、ずっと下を向いたまま、長い沈黙の後ようやく重い口を開いて「世の中がこんなにたいへんな時に、ちよつと言いつらいんですけれども」と、ご自身の抱えきれない悩みを話してくださいました。

その方の言葉を聞いて「これは今、おそらく全国で、すごい数の人たちが同じような状態にあるのではないか」と思いました。「被災地はたいへんなんだから、我慢しなければいけない」という、暗黙

の了解(自粛ムード)が蔓延しているのです。しかし世の中がどうであれ、私(あなた)にとって、一番切実な問題には変わりはないはずですよ。

自死の問題は、いかに話し易い環境を作り、話をしてもらえなが大事なのに、自粛ムードによって、全く逆の方向に向かってしまったようです。震災二週間後くらいから、被災地だけでなく、全国的に「生きていく」力が急に弱くなってきたように感じています。

よく「寄り添うことが大事だ」と言われますが、なかなか難しいことです。何か「してあげる」だと、相手に「ありがとう」と言わせ続け、いつの間にか上下関係を作り出し、「寄り添う」ことから遠ざかっていきます。また、マニュアル通りに動くというのも、機械的になってしまい関係がごちなくなります。

たとえば、「なんか最近眠れないんだよね」という言葉の中に、とても大きなメッセージが隠れていることがあります。何気ない一言は、氷山の一角であって、その下には、自分でも言葉にならないような大きな悩みを抱えていることがあるのです。ですから、心の奥底、深くまで知ろうという気持ちで聞いていただきたいのです。自分の気持ちを聞いてくれる人がいるだけで、少しずつ気持ちは楽になるものです。何を悩んでいるのかさえ分からなくなると、絡まっていた糸が徐々にほぐれていくのです。

これから被災地では、「寄り添う」や「つながり」ということが、ひとつのテーマになってくるのだと思います。しかしこのことは、我々自身の日常でも言えることだと思えます。被災者も支援者も問題を一人で抱えず、多くの人の経験と、目

と耳と心をつなぐことがこれから大事になってくるのではないのでしょうか。我々自身が疲れて潰れてしまいうような時にも、お互いに話ができたら、自分だけの問題ではなく全体の問題として共有し、乗り越えていくことにつながります。これは、自死防止の活動でも、災害支援ボランティア活動でも共通して言えることだと思っております。

情報交換会に参加して

地域のつながり、親戚や家族、職場での、または友人とのつながり等、あらゆる関係が希薄化していると言われる現代。法要についても、直葬、家族葬などの葬儀形態の変化など、人間関係の希薄化は実感するところである。

今回の報告から、非常事態では「つながり」こそが困難を受け止め、乗り越えてゆくことができる力となるのだと教えられた。

しかしながら、日常での「つながり」は、時として煩わしいものでもある。いかに煩わしいことを遠ざけ、快適さを得るかを追求してきたのが、近年の私たちの生活ではなかっただろうか。

現在、現実生活での煩わしい「つながり」は排除されつつも、インターネット上では、さかんに「つながり」を求め合う人間関係が成り立っている。

いったい、「つながり」とは何なのか。現代社会の諸問題の根底にある大きな課題であるように思う。

(研究員 前田 健雄)

大谷派の近・現代史

平和問題映画学習会

「いのちの犠牲」に隠された実状を知る

さる八月十日、名古屋教務所議事堂にて平和問題映画学習会を開催し、百人を超え参加者を得た。本年は、福島第一原子力発電所の事故を受け、インドのウラン採掘地周辺に住む先住民の被曝の問題を取り上げた「ブッダの嘆き」と題した映画を鑑賞した後、福島県二本松市に住む佐々木道範氏をお招きして、「福島に住む子どもたちの現状」についてお話をいただいた。六・七頁では、佐々木氏のお話を中心に報告し、八頁にて映画について報告する。

なお、昨年度まで教区教化委員会にて行われていた学習会を、本年教化センターがその願いを引き継ぎ実施した。

福島からの報告

「被災地と生きる

子どもたちの瞳の奥に感じるもの」

仙台教区仏教青年会会長 佐々木道範氏



長袖・長ズボン・マスクの子どもたちが訴えてくるもの

三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震。自坊のある福島県二本松市は震度六強の揺れを観測しました。地震発生後の三月十四日、原発から一瞬、光が出てキノコ雲が上がる映像がテレビから流れました。しかし、その映像は突然消えてしまい、爆発の映像はそれ以降マスク・メディアからは流されなくなりました。僕は「何かおかしいな。国は情報を隠し、嘘をついているんじゃないか」と思い、ずいぶん迷いましたが避難してきている家族や僕の嫁と子ども、住職を車にぎゅ

うぎゅう詰めにして新潟に避難させることを決断しました。

私のお寺には幼稚園が併設されているのですが、震災後、幼稚園はすぐ休みに入り、そのまま四月の入園式も取りやめました。その後、保護者からの強い要望もあり、除染作業を行った上で幼稚園を再開することになりました。園庭の土を三センチから五センチ削り取ることで放射線量は、かなり下げることができましたが、削り取った土を搬出する場所がないのです。仕方なく園庭の隅に五メートルくらい穴を掘り、取りあえず削った土をそこに入れ、その上に二メートルく



真行寺全景（9月15日現在）

らの土を入れて遮蔽する臨時処置をとりました。しかし、今、二本松市で検出されているセシウム一三七は、半減期が三十年とされています。削り取った放射性物質を埋めても、いつか浸み出して地下水を汚染したり、川に流れていくかもしれません。

私は、当初、「福島第一原発から飛んできたものだから、原発で引き取れ」と、強い憤りを感じていましたが、よく考えてみれば、地球上どこを探しても汚れている場所なんてないんですよ。

原発が爆発してみんなを新潟に避難させていた時には、「国も東電も許せない」という怒りのみが僕の中にわき起こっていました。しかし、だんだん蒸し暑くなる中にもかかわらず、長袖・長ズボンにマスクをして毎日通ってきている園児たちの姿を見ているうちに、何も知らずに原発を受け入れてきた僕の三十八年間の歩みこそが、今、目の前の子どもたちを

苦しめているんだと思うようになってきました。

放射線のないところで、おもいっきり遊ばせたい！

そんな子どもたちの姿を毎日見ている、被曝の心配をしないで思いっきり外で遊ばせてあげたいという思いが高まってきました。北海道庁がフェリー代を、札幌別院の研修センターや旭川の大谷派・本願寺派のお寺さんが会館を開放し、被災した子どもたちを受け入れてくれるということになり、保護者同伴で一グループ約六十名、十日ずつを三回にわけて北海道への疎開が実現しました。子どもたちは、四ヶ月分のため込んだエネルギーを一気に開放するように走り続けていました。

二本松市で実施された五歳から十一歳の子どもたち十八名と大人二名を無作為に選んだ内部被曝検査では、検査した全員の体内からセシウム一三七が検出されました。このような状況の中で、二本松市にも何十人という学者さんが訪れました。そのほとんどの方が、「大丈夫ですよ」「安全ですよ」と言うんです。そんな中で二人だけ「妊婦と小さい子どもは避難した方がいい」とおっしゃった学者さんがいましたが、その方の意見だけが信用できませんでした。

実は、北海道への疎開を働きかけた背景として、放射線のない地域で一週間から十日間保養したら、壊れかけた細胞も復活するし、免疫力も高まってくると言う事例を紹介されたこともあって、ご両

親の仕事の関係などで長期間は福島を離れることができない子どもたちのために北海道行きを決意したのです。

お母さんとお父さんの苦悩

子どもたちのいのちを真つ先に考えているのは、やはり母親なのだと思っています。今の日本の現状だと、父親はどうしても仕事があり、親戚や地域のことなど、様々なしがらみを抱えているような気がします。「はやく避難したほうがいい」という県外の方からの意見をよく聞きます。でも、みんなそんなことはわかっているんです。子どもを守りたい気持ちは十分あっても、今、福島に残っている人たちは、避難したくてもできないんです。

震災以降、宮城県と岩手県の離婚率が下がっているのに対して、福島は二〇%から三〇%増えているのだそうです。母親は子どもを守りたい一心で避難したいけれど、父親は様々なしがらみがあり避難できない。そんなことで福島のお父さんとお母さんは毎日けんかしています。今回の北海道での合宿では、保護者の方にもリフレッシュしてもらえたらという思いがありましたので、僕たちを支援してくれたスタッフが集まっていただいで、福島の現状を聞いていただく場を作りました。

座談会でお母さんたちは皆、号泣していました。「避難させたくてもできない」「子どもたちに申し訳ない」。全員のお母さんたちが泣きながら訴えています。本当にお母さんたちも限界に達している

のです。四ヶ月も子どもを外に出さないで生活するなんて無理なんです。お母さん方の母乳からも放射性物質が出ています。私は泣きながら叫んでくれたお母さんたちの姿に触れて、北海道に一緒に来て本当によかったと思えました。福島での生活の中では、思いつき泣くこともできないのです。

七月に幼稚園で七夕の発表会を毎年行っています。例年なら「ケーキ屋さんになりたい」「ウルトラマンになりたい」というのが幼稚園児の願いです。しかし今年の園児の願いは「原発なくなれ」「外で遊びたい」、そんな願いが短冊に綴られています。私は、その短冊に触れて、子どもたちに「お前のせいだ」と言われている気がしてならないです。

放射性物質は三十年経っても半分にしかならないので、僕はずっと活動を続けていかなければならないと思っています。



園庭で園児たちと(9月15日の様子)

す。死ぬまで福島の子どもたちを定期的な保養させるようなプロジェクトを実施し、生涯をかけて二本松、福島県をきれいにしていきたいと思っています。

福島の未来

私自身、仏青の活動を通して宮城や岩手の復興ボランティアを行う中で、まだまだ復興には時間がかかると思います。まだ光が見えるような気がするのですが、しかし、福島にはまったく光が見えません。僕の近くの避難所でも自殺された方がいます。宮城や岩手に比べ、福島が一番自殺が多いんです。本当に希望が見えないんです。人は光が見えないと生きていけないんだと思います。

そこで、どうにか福島にも光を見い出したいと願い、「子どもの避難」「街の除染」「自分たちの食べ物・飲み物の放射線が測定できるようにする」活動を始めています。僕がやれることを一生懸命やりたい。その活動が今、私の光であり、福島の光になってくれることを願うばかりです。

最後に一つ。メディアでは震災関連の報道が段々減少してきているように思います。僕が通っている避難所は、まだライフラインが通っていないところもあるし、福島も宮城も岩手もまだまだ復興していません。だから、忘れないでほしいのです、まだ復興してないってことを。福島の復興には何十年かかるか分からないし、放射線の中で生活せざるを得ない人や避難したくてもできない人がいて、苦しみながら生活している人たちがいると

いうことを、忘れないでほしいのです。僕がみなさんに言えることは一つだけ。「たすけてください」。それしか僕には言えません。僕の力ではどうしようもなく、支援がないとどうしようもないのです。忘れないでください。たすけてください。

平和問題映画学習会を終えて

今回の平和問題映画学習会を終えて二つの問題が出てきた。一つは、震災から出た放射性物質のない地域に移動することによって、セシウム一三七を体外に排出することができるとのことである。確かに、生物学的半減期では新陳代謝によって体外にセシウム一三七が排出されると言われている。だが、そのデータや根拠はあまり確認できていない。また、放射性物質が一旦体内に入れば、その影響が体内に及ぶのは避けられない。仮に後で体外に排出されたとしても、その影響は体内に残っている。今後、正確なデータや根拠によって、被曝した人が少しでも正確な情報を得られるよう願う。

もう一つは、映画に出ていた被曝によって体が不自由な状態で生まれてきた子どもたちについてである。子どもたちは被曝によって障害者として生まれてきたわけだが、障害者として生まれてくるのが問題なのではない。被曝によっていのちが奪われ、いのちの尊厳が奪われることが問題なのだ。公害問題と障害者運動という一見矛盾する問題にどう向き合うのかという課題をいただいた。

INFORMATION

平和問題映画学習会で
上映された映画の紹介

『ブッダの嘆き -ウラン公害に立ち向かう先住民』

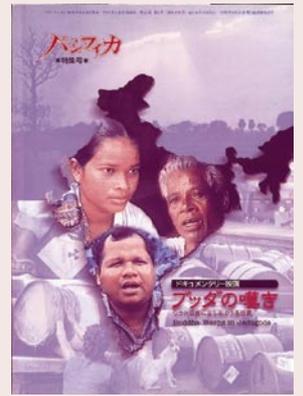
インドのジャールカンド州ジャドゥグダにあるウラン採掘場では、放射性物質を含む廃棄物が野ざらしのまま投棄され、そこに住む人々の労働環境も劣悪だ。近隣住民には、ガン、流産、先天異常などの健康被害が広がっている。「何かがおかしい!」先住民が多く住むこの地域の住民が、国営のウラン公社を相手に立ち上がった。

スリプラカッシュ監督によって1999年に発表されたインドでのウラン採掘場

をめぐる被曝の実態に迫ったドキュメンタリー映画。2000年3月には、第8回地球環境映画祭で大賞を受賞している。

今、日本では、福島第一原子力発電所の事故を受け、今後の原子力発電所の存続を含めた論議が始まった。放射性物質を利用する福島と放射性物質を採掘するジャドゥグダに共通するものは何か。是非、多くの方に考えていただきたい。

なお、本映画「ブッダの嘆き」は、学習会などで上映されることを願うアース・ビジョンが貸し出しを行っています。インターネット等で検索いただくか(アース・ビジョン組織委員会事務局www.earth-vision.jp)、電話(03-5802-0525)にてお問い合わせください。

教化センター日報
■2011年6月～8月

6月3日 HP「お東ネット」会議
7日 研究業務・「平和展」学習会
9日 研究生・実習「真宗門徒講座」
17日 研究生・特別「名古屋教区同朋会運動推進協議会公開講座」(教区主催)

研究業務・「平和展」学習会

24日 研究生・第5期生修了式

27日 教化センター運営会議

7月7日 HP「お東ネット」会議

8日 研究生・実習「真宗門徒講座」

研究業務・「平和展」学習会

15日 研究生・特別 個別面談

22日 研究生・聖教研修(荒山淳センター

主幹)

29日 研究生・教化研修(瀬尾顯證氏)

研究業務・「平和展」学習会

8月5日 研究生・特別「私にとって真宗同朋会運動とは」

10日 HP「お東ネット」会議

研究業務・「平和展」学習会

平和問題映画学習会

12日～15日 「あいち平和のための戦争展」参加

19日 研究業務・「平和展」学習会

29日 研究生・第8期生面接

第8期
研究生あいさつ

研究生第8期生として教化活動に一生懸命取り組み、研究生のカリキュラムを通して現代社会と自らの課題も明らかにしていきたいと思っています。また、研究生になったことにより与えていただいた出会いと学びの場を大切にいき、自らの考え、視野を広げていきたいです。至らぬ点多々あると思いますが、これから3年間よろしくお願ひいたします。



いしはら ただかず
石原 唯和
(第11組 専随寺)

開法の実践場にて諸先輩や門徒の方々と共に真宗について様々なことを学んで行きたいと思っています。また真宗門徒講座など色々な場面で発表する機会がありますが、その時にしっかり発表出来るように励んで行きたいです。最後に多くの方々と出遇い、触れ合っていきたい研究生第8期生としてこれから三年間がんばっていきたく思います。



はなその せいじ
花園 盛二
(第26組 光圓寺)

7月1日付で業務嘱託として3名が委嘱されました。今後、夜間業務・資料整理等に携わっていただきます。

教化センターの事務をはじめ、様々な場面で多くの皆様とお会いできると思います。そのような出会いを通して、多くのことを学びたいと思います。それとともに、センターをご利用する多くの方々の助けとなれるように尽力したいと思います。

たまの まさとみ
玉野 正聡 (第19組 覺岸寺)

教化センターで研究生の頃よりお世話になった方々と一緒に仕事ができるご縁をいただき、嬉しく思います。今までいただいた恩返しのできることを喜びとして、微力ながらがんばりたいと思います。ご指導のほど、よろしくお願ひいたします。

いとう きょうしん
伊藤 教信 (第19組 慈光寺)

昨年度まで三年間、教化センターの研究生として学ばせていただいております。今年度からは教化センターの嘱託職員として、昨年度までの学びを名古屋教区の教化の現場に立って生かしていきたいと思っております。ご指導の程、宜しくお願ひします。

にむら かずたか
二村 和敬 (第21組 智願寺)

公開講座にご参加ください

◆聖教研修「『正信念佛偈』に学ぶ」※どなたでもどうぞ

講師：荒山 淳(教化センター主幹) 会場：名古屋教務所1階 議事堂
期日：2011年10月21日(金)・12月22日(木) テキスト：『正信念佛偈』(東本願寺出版部刊)
時間：午後4時30分～6時00分

《編集者雑感》

今号は、報告記事が多く、全体的に読みごたえのある紙面になったのではないだろうか。原稿がなかなか揃わず、校正もドタバタ。内心焦っていたが無事に出来上がりほっとしている。(S)

■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。